

卒業式式辞

日に日に暖かくなり、まわりの山々の木々もそろそろ咲くぞと言わんばかりの春色になってきました。

このような春の訪れとともに、今日この佳き日に、卒業式を迎えることになりました。

卒業生の皆さん、卒業おめでとございます。

4年前に入学して、この2年間は、新型コロナウイルスの感染防止のためにオンラインの授業と対面での授業をハイブリッドで行ってきました。友達との交流を始めとして、学生生活のさまざまな場面で不自由な思いで過ごしてきたことと思います。

しかしながら、これからの人生の中でも、このような自分の思いどおりにならないこと、不自由を強いられることが起こると予想されます。そんなときは、このコロナ禍で過ごした時間を思い出してください。このような逆境のなかでも本来の自分を見失わず、しっかり勉強して、志の実現に向けて取り組んでくれたのです。

私たち、教職員一同は、そのような皆さんを誇らしく思いますし、心からの拍手をもって送り出したいと思います。

さて、卒業に当たり、私から餞の言葉として、建学の精神を送りたいと思います。

本学の建学の精神は、人間平等、個性尊重、和と感謝です。

人間平等とは、私たち人間には誰もが平等に命を授かっていること。そして命とは、時間であること。その命、時間を誰かのために使うこと、その誰かの喜ぶ姿を、自分の喜びとして生きていくこと。このように時間を尊く使って人生をたくましく、しなやかに生きていってください。

個性尊重とは、自分とは姿、形だけでなく、異なる価値観や感情をもつ存在がいることを認め、そのような多様性のなかで切磋琢磨するからこそお互いの

成長があることに感謝し、異なる個性への尊敬、リスペクトの念をもつことです。「和して同ぜず」という言葉が論語にあります。作家の武者小路実篤は、自分なりに「君は君、我は我なり、されど仲良き」と五七調に言い換えて、座右の銘にしていたそうです。

和と感謝については、言葉の通り、仲良くすること、調和すること、感謝することを忘れないことです。食事の前に手を合わせて「いただきます」をしますが、これにはどのような気持ちを込めるのがいいのでしょうか。この食事を料理してくれた人への感謝でしょうか、それだけではありません、食材を育ててくれた人にも感謝をする。それでも不十分です。私たちの「命」のために、動物や植物の「命」を「いただく」のです。その恵みを育ててくれた、おおもとの自然に感謝することを忘れてはなりません。そのようなたくさんの目には見えない、おかげさまに感謝しながらの「いただきます」なのです。

さらに付け加えるなら、この食事をいただくに値する仕事や学習をしたかと「内に省みる」ことも大切です。その結果、この食事をいただくに十分な価値はないけれど、この食事をいただいたのちは、「おかげさま」に恥ずかしくないようがんばりますと心に誓って味わうのもいいと思います。

目には見えないけれど、多くの人や動植物、自然のつながりと、そのおかげで私たちの「命」が維持されていることに感謝し、「おかげさまでの、いただきます」は、その命、時間を誰かのために使うことを惜しまないこと、これが私たちが授かった「天命」「使命」であり、SGDSの本質といっても過言ではありません。

春は別れの季節ですが、同時に、出会いの季節でもあります。

別れの寂しさと名残惜しさはつきませんが、卒業生のみなさんには、これから素晴らしい出会いと青天井の未来が待っています。

今回は出席をしていただけいただけませんでした。保護者の皆様、お子さまのご卒業、誠におめでとうございます。

大切なお子さまをお預かりして四年間、微力ではありましたが、教職員一同、全力を尽くして教育に取り組んでまいりました。ご卒業をお祝い申し上げますとともに、この間、本学の教育活動に、ご理解とご協力をいただきましたことを、心より感謝申し上げます。

卒業生の皆さん、皆さんの新しい門出にあたり、「皆さん、ひとり一人のこれからの人生に幸多かれ」と、教職員一同心から祈っています。

卒業おめでとうございます。皆さんの幸せと活躍を祈っています。

また元気な顔を見せに来て下さい。

令和4年3月23日

関西福祉大学学長 加藤 明

